「国姫」の生涯を追って

大貫　魁星

歴史動画『日向御前 国姫』を視聴し、歴史の荒波をたくましく生き抜いた一人の女性の生き様に深い感銘を受けました。国姫は徳川家康のひ孫であり、本多忠勝の孫でもあるという大変華麗な血統を持つ女性です。動画では、幼少期の「おてんば」な性格から、成長して夫や家のために奔走する力強い姿が生き生きと描かれており、一気に物語に引き込まれました。彼女の生涯を学ぶ中で、私は彼女の残した功績が、現在の福井県坂井市にある「丸岡」の歴史に深く関わっていることを知り、大変興味深く感じました。

動画を観て最も印象に残ったのは、国姫の持つ圧倒的な力強い生命力と気の強さです。当時の武家の女性は静かに生きるイメージがありましたが、国姫は違いました。お婿さん候補の頭を叩いて回るという破天荒な姿に驚かされる一方で、その気の強さは、キリシタン弾圧といった激動の時代において、夫の有馬直純や有馬家を命がけで守り抜く行動力へと昇華していきます。彼女は夫の領地替えに伴い、長崎から宮崎の延岡へと移り、現地で「日向御前」と慕われるようになります。自由奔放さを見せながらも、領民や家族のために尽くした彼女の生き様は、現代の私たちから見ても非常に魅力的で、かっこいい女性像として深く心に残りました。

この動画をきっかけに調べる中で、私は「日向」の姫であった彼女が、遠く離れた北陸の「丸岡」と運命的な繋がりを持っていることを知りました。国姫が守り抜いた有馬家は、彼女の没後、日向延岡から現在の福井県坂井市にある「丸岡藩」へと国替えになります。そして明治維新を迎えるまでの約百六十年間、有馬家が丸岡の地を統治することになるのです。現存十二天守の一つである丸岡城が有名なこの地に、なぜ九州の有馬家が移ったのか疑問でしたが、その理由は国姫の存在にありました。有馬家はかつてお家取り潰しの危機に瀕していましたが、家康の養女である国姫が命がけで家を支え、幕府との強い繋がりであり続けたからこそ、後に丸岡の地を与えられるほどの信頼を得ることができたのです。つまり国姫がいなければ、丸岡の歴史を彩る有馬氏の統治は存在しなかったということになります。

一人の女性が必死に守り抜いた有馬家が、その後、現在の丸岡の街並みや文化を築く礎になったのだと思うと、歴史の不思議な巡り合わせを感じます。国姫の魂を祀る供養塔が今も丸岡の白道寺にひっそりと佇んでいるように、彼女の情熱は今の丸岡にも確かに息づいています。教科書の文字を追うだけでは見えてこない、地域をまたいだ壮大な歴史の繋がりを肌で感じることができ、自分にとって非常に視野が広がる素晴らしい機会となりました。